

『祖堂集』異文校證（即／則）

衣 川 賢 次

1 『祖堂集』中の「即」「則」

「即」「則」二字は通用する，すなわち置き換える場合があることは，われわれも日常的に讀書経験で心得ているところである。王引之『經傳釋詞』にも，「則者，承上起下之詞。《廣雅》曰：則，即也。字或通作即。……則與即，古同聲而通用。」（卷8，則即條¹⁾）と言って通用の例を列挙している。「古同聲」というように，上古音では聲紐，聲調において等しい。

即 質部精母入聲 則 職部精母入聲

中古音は（『廣韻』による），

即 子力切 精母職韻開口三等入聲曾攝 (tsiək4)

則 子德切 精母德韻開口一等入聲曾攝 (tsək4)²⁾

『廣韻』では「職徳同用」，つまり詩文通押規定の範囲にある極めて近い音であり，実際の詩文用韻において通押例は多い³⁾。しかし『祖堂集』における「即」「則」の問題には別の要因があり，このことについて考察したい。

『祖堂集』を読むと，もとづく文献では「即」であったものが「則」に替わっている場合がしばしばあるのに氣づく。たとえば，巻1の釋迦牟尼佛章は多くの經論に據って構成されているが，佛陀入滅の一段は『大般涅槃經後分』巻下をほとんどそっくり引用している。

爾時迦葉與五百弟子在耆闍崛山，身心寂然，入于三昧。於正受中，倏爾心驚，舉身戰慄，從定中出，見諸山地大振動，則知如來已入涅槃。（『祖堂集』巻1，釋迦牟尼佛章，24/16頁⁴⁾）

2 『祖堂集』異文校證（即/則）

時大迦葉與五百弟子在耆闍崛山，去拘尸城五十由旬，身心寂然，入于三昧。於正受中，倏然心驚，舉身戰慄，從定中出，見諸山地大振動，即知如來已入涅槃。（『大般涅槃經後分』卷下，T12.908b）

『祖堂集』の「則」はもとづく『大般涅槃經後分』では「即」であった。「迦葉はにわかに胸騒ぎを覚えて身體が震え，定中より出で，大地が震動するのを見て——」という文脈からすれば，「即——ただちに知った，如來はすでに涅槃に入られたことを。」と續かなくてはならない。つづく叙述中に二度現れる「即」もすべて『祖堂集』では「則」に替わっている。ただし意味においてさしたる不都合は生じていない。ところが，「即位」や「即時」「即今」までも「則位」「則時」「則今」に替えられているところがある。

「則位」 ……寂然滅度。時當此土王莽則位十八年壬午歲矣。（卷2，第十九祖鳩摩羅多章，53/67頁）

「則時」 又問：「於天下如何？」由云：「則時無也。他一千年外，聲教被於此土。」（卷1，釋迦牟尼佛章，19/12頁。『續集古今佛道論衡』作「即時」，T52.397c）

「則今」 僧問：「如何是鳳嶺境地？」師云：「闍梨則今在什麼處？」（卷12，同安章，469/565頁）

問：「如何是黃梅一句？」師云：「則今作摩生？」（卷12，龍光章，474/571頁。『景德傳燈錄』卷23洪州大寧隱微章作「即今」）

問：「如何是和尚廣（匡）化？」師云：「非但一人，更有來者，我亦向他道。」學云：「忽有大闍提人來，又作摩

生？」師云：「他个還問人摩？」僧云：「故問。又作摩生？」師云：「但將他來！」僧云：「則今現來。」師便喝出。（卷13，報慈章，495/592頁）

日用真珠是佛陀，何勞逐物浪波波？隱現（顯）則今無二相，對面看珠識得摩？（卷14，石鞏章「弄珠吟」，534/632頁。

『宗鏡錄』卷11引作「即今」)

問：「父母未生時，鼻孔在什麼處？」云：「如今已生也，鼻孔在什麼處？」滄山別云：「則今阿那个是鼻孔？」（卷16，南泉章，597/712頁）

大夫別時云：「則今和尚不可思議，到處世界成就！」（卷18，陸亘大夫章，668/800頁）

これらは明らかに「即」が「則」に書き替えられたのであり、その結果文義に通順を欠いている。このほかにも、「尋則（即）」「則（即）便」（すぐに、ただちに）がある。

「尋則」 師付法已，即離本位，至樹下立，而舉左手，攀其樹枝，尋則滅度。（卷2，第十七祖僧伽難提章，51/63頁。『寶林傳』卷3作「尋即」)

居士云：「豈有任摩事？」遂起來自看，其女尋則據床端然而化。（卷15，龐居士章，586/702頁）

「則便」 天皇云：「見即直下便見。擬思則便差。」（卷5，龍潭章，188/247頁。『景德傳燈錄』卷14龍潭崇信章作「擬思即差」，『肇

4 『祖堂集』異文校證（即/則）

論』「答劉遺民書」：「至理虛玄，擬心已差，況乃有言，恐所示轉遠。」)

若會則便會，若不會，散去。(卷16，黃蘗章，615/732頁。
『景德傳燈錄』卷9 黃蘗希運章作「即便」)

かくもしばしば「則」字の複音詞が出現すると、これらを語彙として認定してしまいがちであるが、書き替えられた結果であることに留意すべきである。いかにも「即」「則」通用という訓詁はあるが、唐宋時代の語録の文章に任意に搬用できることではない。

つぎの「則」一字の例も，上記に準じて「即」であったと考えてよい。

《山海經》云：「身毒之國，軒轅氏居之。」廓（郭）璞註曰：「則中天竺也。」(卷1，釋迦牟尼佛章，10/6頁。『釋迦氏譜』作「即天竺也」T50.87b。
『山海經』卷18海內經：「天毒。」郭璞注：「天毒即天竺。」)

師問座主：「所業什麼？」對云：「講《維摩經》。」師云：「維摩還有祖父也無？」對云：「則某甲便是。」師云：「既是祖父，爲什麼却与兒孫傳語？」(卷18，趙州章，656/785頁)

趙州章の例は，もと「即某甲便是」であったはずで，この場合の「即」は主語を強く提示するもの⁵⁾。「則」にこのような用法はない。

以上，「則」では文意通順ならざるものについて，もとづく資料に照らし，もとは「即」であったことを確かめ，もとづく資料を缺くものについては，宋代語録の文體として参照系たりうる『景德傳燈錄』に採録がある場合はこれを参考⁶⁾に，もとは「即」だったことを類推した。

個別にはこのように處理して，文意を疎通させればよいのであるが，「即」を機械的に「則」に書き換えたと思えないこの現象を，どう理解すべきで

あろうか。

2 「即」「則」混亂の原因の説

この問題を考える手がかりが、次の宋代筆記の一節にある。

《金剛經》凡有六譯：姚秦鳩摩羅什、元魏菩提流支、陳眞諦、隋笈多、唐玄奘、義淨。古今所宗，惟秦譯。「慧命須菩提」六十三字，世傳因僧靈幽入冥得之。又云：魏菩提流支文，後人參入之。經中有「即」，「則」二字，高麗大安六年以義天之祖名稷，故易「即」爲「則」，壽昌元年刊於大興王寺。後從沙門德詵、則瑜之請，仍還本文，而以「則」音呼之，此本或傳入國中故也。（趙彥衛『雲麓漫鈔』卷⁷⁾3）

『金剛經』は六度翻譯された。すなわち、姚秦の鳩摩羅什譯，元魏の菩提流支譯，陳の眞諦譯，隋の笈多譯，唐の玄奘譯，義淨譯である。しかし古來より羅什譯のみが尊ばれた。「慧命須菩提」以下六十三字は，僧靈幽が冥界で教えられて加えた，あるいは元魏の菩提流支譯の文を後人が挿入したと言われている。經文中に「即」「則」二字があるが，高麗大安六年〔1090〕義天の祖の名が稷であったため，同音の「即」を「則」に替え，そのテキストが壽昌元年〔1095〕に大興王寺で刊刻された。しかしのち沙門德詵と則瑜の進言により，もとに戻した。しかるに今，「即」を「則」の音で讀誦することがあるのは，改字された本がわが國に傳入しているためであろう。

これによると，高麗の大興王寺で壽昌元年（1095）に刊刻された『金剛經』は，高麗義天（1055-1101）の祖諱「稷」音を避けるため，經中の同音字（嫌名）「即」をすべて「則」字に替えてあったという。後にもとに戻されたが，中國（宋）においては讀誦に依然として「則」音で讀んでいる。それは「即」が「則」に替えられていた高麗版の影響だということのである。佛典の經文を避諱によって改字することは，おそらく中國でもなかったことである。中國よりも儒

6 『祖堂集』異文校證（即/則）

教的であった高麗の特徴を示すものとして、宋代文人の興味を引いたのであろう。もうひとつの資料を参照してみる。『辨非集』（善熹撰、淳熙5年[1178]序）の、解空法師『金剛事苑』を駁した一則である。

即則。有人問：「此經多云即，又多云則。用此二字，如何分別？」「即，不離於此也；則，由之於此也。各隨文理語勢，用之不同。」

非曰：近有蓮社淨樂居士張承宣跋云：「即則二字者，謹按：高麗太安六年，以彼國之祖名稷故，凡經史之字，悉易即爲則，避嫌也。至壽昌元年，詔刊此經於大興王寺，從沙門則瑜，德詵之請，仍還本文。或傳至中國，至有互寫。」然人有所問，知與不知，宜當實對，何苦肆爲穿鑿？（續藏，第103冊，587c）

「即」と「則」について。ある人が問う，「この經には即字が多く用いられ，また則字も多く用いられている。この二字の使い方にはどういう區別があるのか。」答う，「即は，ここを離れぬ義，則のほうは，ここへ至るという因果關係をいう。それぞれ文脈語勢にしたがって使い方が異なる。」

批判している。「近頃，蓮社淨樂居士張承宣使どのの跋に次のように言っている，『即則二字の問題について，謹んで按ずるに，高麗の太安六年，かの國の祖先の諱が稷なるによって，あらゆる經史の書の即の字をことごとく則に改めた。嫌名を避けたのである。壽昌元年，詔によってこの經を大興王寺で刊刻したとき，沙門則瑜，德詵の進言に従い，もとに戻した。中國に傳來した刊本のなかには，即則字の入れ替わった本がある』と。これが由來であるが，質問に對しては，知れることと知らざることを，ありのままに答えるべきであって，手前勝手なこじつけをしてはならぬ。」

『辨非集』で言及しているように，刊本『金剛經』の張承宣使すなわち張掄⁸⁾の跋文がこの話の來源であつたことがわかる。しかしこの跋は今では傳わらず，高麗のことの傳聞ゆえ，兩資料の記述には若干の齟齬があつて，壽昌元年刊本が避諱した本なのか（雲麓漫鈔），回改した本なのか（辨非集），いささかわかりにくい。宋に傳來していた高麗刊本の『金剛經』に「即」「則」字の混亂があ

り、宋での讀誦に影響が出ているのは、刊刻のさいに高麗の避諱によって、一度「即」を「則」に替えたことが原因であるということらしい。あるいはまた、後にもとに戻す回改のときに不手際があったということもありうる。そういう混乱があったからこそ、『金剛事苑』に引く質問者が「即」「則」の義をあらためて問題にしたのであろう。解空法師はなぜ「即」「則」二字が問題となったのかを考えもせずに、二字について拙い字解をしているのを、善熹は難じているのである。

義天は高麗文宗の第四子。宣宗元年（宋元豐7年，1084）に入宋し、大藏經未收の章疏を搜求して、歸國後の宣宗7年（遼大安7年，1091）に宋、契丹、朝鮮、日本より搜集した章疏四千七百四十餘卷の目録『新編諸宗教藏總録』3巻を編輯した。これがいわゆる義天の續藏である。その翌年かれが住持していた大興王寺に教藏都監が置かれ、續藏の開板刊行が開始された。避諱の回改を進言したという則瑜、徳詵の名は、續藏に収める『金剛般若經略疏』（智儼撰。菩提流支譯に據る疏）の識語に續藏校勘者として、

壽昌元年甲戌歲高麗國大興王寺奉

宣雕造

祕書省楷書臣魯 榮 書

講華嚴經興王寺太師賜紫臣 則瑜 校勘

講華嚴經興王寺太師賜紫臣 徳詵 校勘

と見えるから¹⁰⁾、このふたりは大興王寺で住持義天のもと續藏刊行の一翼を擔っていた座主であった。大安6年（1090）は續藏刊行が策定された年、壽昌元年（1095）は、大興王寺で續藏の章疏類の刊行に全力を傾けていた時期である。ならば『雲麓漫鈔』と『辨非集』にいう、ふたりの避諱回改の進言は、續藏校勘に際してのこのように思えるが、そのとき同時に詔によって『金剛經』も刊刻されたのであろう。『辨非集』では「經史之字」すべてにわたって避諱改字がおこなわれたというのが、それは検証できることであろうか。

8 『祖堂集』異文校證（即/則）

さらに疑問は、義天は高麗文宗の第四子、したがって祖諱といえ、顯宗（諱は詢）以前の祖諱ということになるが、稷を諱とする直系の人は見あたらないことである（朴鎔辰氏の示教による）。またこの避諱のおこなわれたことを證する高麗の資料も、目下みあたらない。この點で疑問をのこすことになり、避諱説がはたして正しいか否かの檢證が必要である。しかし避諱説による即則問題は後世に受け繼がれた。例えば『金剛經註說彙纂』（乾隆58年、1739）の凡例にも、

則與即二字、各本每多不同。嘗考其由、起於高麗王名稷、彼人欲避其音、故於經中去即改則、因此以僞亂眞。海虞嚴氏折衷諸說、謂合兩之義爲即、相仍之義爲則、即或可用之相仍、則不可用之合兩。此說最爲諦當。（續藏第40冊、753a）

「即」「則」二字はテキストによって多くの異同がある。その原因は、高麗の王の諱が稷であったため、彼の國の人が同音字を避けようとして、經文の「即」を「則」に改め、眞僞が混亂したのだと言われている。この二字の區別について、海虞の嚴氏が諸説を折衷して、「前後緊密な接續が即、因果關係を示すのが則。即是因果關係に用いてもよいが、則は緊密な接續には用いない」とした。この理解がもっとも妥當である。

と言ひ、原因を避諱に歸することをもつて見識となして疑わず、高麗のことゆゑそれ以上の穿鑿もしていない。

3 『金剛經』の檢證

上にいう「即」「則」の混亂は現存の『金剛經』テキストに現れているだろうか。二字の情況を敦煌寫本中の隋寫經2本、唐宮廷寫經4本、および高麗藏再雕本、高麗刊本3本、唐玄宗御注本（房山石經）、柳公權書刻石本、房山石經2本、蘇東坡書寫本、集注本（明世祖序）、磧砂藏本、永樂北藏本など18本¹¹⁾について調べてみたところ、次のような結果であつた（附録の表1、2参照）。

- (1) 長安宮廷寫經を唐代の標準テキストとみると、「即」は20字、「則」は34字もちいられている。隋寫經、柳公權書刻石本、房山石經本、高麗藏再雕本、磧砂藏本は唐宮廷寫經とすべて同じである。
- (2) 玄宗御注本、永樂北藏本には「則」においてのみ13%の混亂が見られる（「則」34字のうち4字が「即」になっている）。また高麗刊本3本には「即」において17%（「即」20字のうち3字が「則」になっている）、「則」において8～17%（「則」34字のうち3～5字が「即」になっている）の混亂が見られる。
- (3) 蘇東坡書寫本は「即」（唐宮廷寫經にない1字が増えている）「則」計55字のうち43字が「即」になっている。集注本は「即」（唐宮廷寫經にない2字が増えている）「則」計56字のうち、1字を除いてすべて「即」になっている。

すなわち二字の異同からみて、現行の『金剛經』は3類に分けられる。

第1類 隋寫經、唐宮廷寫經、柳公權書刻石本、房山石經本、高麗藏再雕本、磧砂藏本

第2類 玄宗御注本、高麗刊本3本、永樂北藏本

第3類 蘇東坡書寫本、集注本

玄宗御注本と高麗刊本が近いということは、高麗刊本における混亂が高麗の避諱とは無関係であり、唐代にすでに「則」を「即」に替えてゆく傾向があった、そのテキストが高麗刊本に引き繼がれたと見るべきであろう。

『金剛經』のように短く、しかもさかんに讀誦された經典に文字の變動があるのは、やや奇異の感なしとしない。しかし『金剛經』受容史をみると、羅什による譯出（姚秦弘始3年、401）から南北朝末までの寫本は極めて少なく、隋寫本が些少遺されている状況であったのが、唐代に至って爆發的な書寫が始まり、ついには敦煌寫經のうち單一經典として最多數を誇ることになる。これは唐初に『金剛經』をもって佛典の代表とする見かたが現れ、玄宗が三教の一として、『孝經』、『道德經』とともに注釋を著わしたことが大きな要因であろう。

佛典にもとづく靈驗譚がこの頃を境に『法華經』から『金剛經』に傾斜してゆくこととも揆を一にしている。寫經功德の風が蔓衍したわけで、その結果經文にも亂れが生じ、五代をへた宋初のころには、それが甚しくなっていたらしい。釋智圓「詳勘金剛般若經印版後序」（天禧元年[1017]作）には、

但年祀遼遠，舛誤實多。好異之徒，不無添糅，或節爲章分，或間以頌文，或前陳啓請，或中加別譯，或增其字句。（『全宋文』卷309）

しかし羅什の譯出時から年代が隔たってくると、誤りがはなはだ多くなった。

通常に満足しない輩が勝手にあれこれに加え始め、節や章に分けたり、經中に頌をさしはさんだり、經文の前に啓請を陳べたり、經文中に異譯を挿入したり、字句を増したりという有様である。

と言っている。これは智圓が信徒の要請で『金剛經』を開版刊行するに際して、古本を搜求し、論疏を参考に校訂した時のもので、それら誤りの實例をいくつか挙げて糾謬しているが、「即」「則」のことには及んでいない。人の注意を引くようになるのは少しのちのことである。元符3年（1100）蘇東坡書寫本のよような「即」が壓倒的に多いテキストが出現すると、さすがにその原因を求めたくなる。そのような時に現れたのが高麗避諱説であった。その眞偽は依然として未詳であるが、のちついに「則」字をほとんど「即」字に替えた明代の集注本が出現する。この現象は、避諱によっていったん「則」に統一され、その回改に際して混亂を來したと信ぜられたため、それを收拾しようと逆に「即」に統一してしまった結果とかがえるべきであろうか。

4 『修心要論』の檢證

高麗の避諱が引き起こした「即」「則」混亂という説の眞偽、および混亂の影響の範圍の解明にはさらに時間を要するが、ひとつの禪籍についてのみ、とりあえず檢證しておきたい。「即」「則」のことは、じつはかねてから氣にかか

っていたからである。五祖弘忍の作とされる『修心要論』の一節、

一切義理、乃三世之事、譬如磨鏡塵盡、自然見性。即今無明心中學得者、終是無用。若能了然不失正念、無爲心中學得者、此是真學。雖言真學、竟無所學。¹³⁾（鈴木大拙校訂本第10段）

の「即今」は、敦煌本の諸寫本（S2669, 3558, 4064, P3434, 3559, B8391[字4], 龍谷大學本）はみな同じであるが、『最上乘論』という別名で知られる傳承本は朝鮮本で、『禪門撮要』本、安心寺刊本みな「則今」になっている。大正藏所收本の底本は續藏經で、それは明劉慶4年（1570）安心寺刊本に據っているのであり、やはり「則今」である。

そこで『修心要論』の20段全體につき、敦煌寫本と朝鮮刊本の「即」「則」字の異同（敦煌本に「則」字は現れないから、つまり敦煌本の「即」字が朝鮮本でどう替っているか）を調べてみる。¹⁴⁾敦煌本（7本を相互に補い誤脱を校訂した本文）の「即」29字は、『禪門撮要』本、安心寺刊本では「即」10字、「則」16字、缺文3字という状況であった。すなわち、ここにもたしかに混亂が起っているのである。

「即」「則」二字は多くの場合互換可能であるとはいえ、先人が「語勢に緩急の別あり」（馬氏文通）というように、行文のリズムに関わる助字である。短篇の『修心要論』は北宗論書に特徴的な、附會に近い論理を繋いでゆく行論で、それには「即」を連用するのがふさわしい。しかるに朝鮮本では過半が「則」に替ってしまっているので、特有の行論のリズムを失っているように思える。

これは『祖堂集』の場合とまったく同じである。『祖堂集』は高麗高宗32年（1245）に匡儁が改編刊行した。義天の時代から150年後のことである。上掲の『雲麓漫鈔』によれば、「即」「則」の避諱改字は5年後に回改されたが、そののちもなお「即」「則」字の混亂が見られたという。150年後の『祖堂集』、300年後の『最上乘論』の「即」「則」混亂現象はその名残りなのであろうか。大正藏の三藏の主要部分が高麗藏であり、朝鮮本がまま底本となっているから、

やはりこの問題が本文校訂に関わってくることが予想される。

疑問はまだのころが、以上は『祖堂集』に散見する「即」「則」字の混亂の處理と混亂の原因につき、いささか校證を試みたのである。

註

- 1) 王引之『經傳釋詞』, 香港太平書局, 1966。
- 2) 郭錫良『漢字古音手冊』北京大學出版社, 1986。
- 3) 『祖堂集』所收偈頌にも2例がある。(1) 卷3 慧忠章「耽源偈」[北國德識職], (2) 卷4 丹霞章「弄珠吟」[測職得德力職]。
- 4) 『祖堂集』の引用頁は, 禪文化研究所影印本/中華書局本。
- 5) 「(即心即佛という場合の, はじめの)即という語は, その次にくる名詞を, 立言の主題として強く規定し正面に押しだす, という機能をもつ言葉である。」(入矢義高「禪語つれづれ」, 『求道と悦樂』, 岩波書店, 1983)
- 6) 道原撰『景德傳燈錄』30卷は『佛祖同參集』20卷をもとに, 景德3年(1006)上進, 當代一流の文臣楊億らの一年にわたる綿密な刊定をへて再び上進, 大中祥符4年(1011)敕命によって大藏經に編入され, 權威をもって以後の燈史編纂の規範となった。
- 7) 唐宋筆記史料叢刊, 40頁, 中華書局, 1996。點校者傅根清氏の考證によると, 趙彥衡の生卒は約1140-1210。『雲麓漫鈔』は嘉泰2-4年(1202-4)ごろに刊行された。
- 8) 張掄, 字は才甫, 開封の人。淨樂居士, 蓮社居士と號した。淳熙5年(1178)に寧武軍承宣使となった。「禪宗頌古聯珠集序」(淳熙6年, 1179), 「大慧禪師年譜序」(淳熙10年, 1183)がある(『全宋文』卷5403)。この「金剛經跋」は『全宋文』未收。
- 9) 池内宏「高麗朝の大藏經」(上) 第四 義天の續藏, 『東洋學報』第13卷第3號, 1923。大屋德城『高麗續藏彫造攷』便利堂, 1936。
- 10) 大屋德城上掲書圖版上。この資料を教示くださった朴鎔辰氏に謝意を表する。
- 11) 隋寫經は津藝170(大業9年, 613寫), S2605(大業12年, 615寫)。
唐代宮廷寫經として知られる敦煌寫本の『金剛經』と『法華經』は, 則天武后が亡親菩提供養のために各三千部を書寫させたものであったことが, 趙和平「武則天爲已逝父母寫經發願文及其相關敦煌寫卷綜合研究」(『轉型期的敦煌學——繼承與發展國際學術研討會論文集』南京師範大學, 2006)で明らかにされた。この種の『金剛經』寫本は目下8本が確認されているが, 今回はこのうちの4本を用いた。文字は言うまでもなく均質である。
高博001(咸亨3年, 672寫) 大谷05(咸亨4年, 673寫)
S0036(同上) S0513(上元3年, 676寫)
玄宗注(開元23年, 735)は, 房山石經本(天寶元年, 742)を底本に敦煌本,

トルファン本をもって校訂した筆者校本（『唐玄宗《御注金剛般若經》の復原與研究』、『花園大學文學部研究紀要』第36號，2004／『御注金剛般若經』、『藏外佛教文獻』第2編總第10輯，人民大學出版社，2008）に據った。

柳公權書金剛經刻石本（長慶4年，824）は『中國書法 柳公權』第1冊（文物出版社，1980）。

房山石經本は五洞142，八洞76・三洞76（『房山石經』隋唐刻經，華夏出版社，2000）。

『蘇東坡書金剛經』（元符3年，1100）は天台山國清寺印行本，1986。

『金剛經集註』（永樂21年，1423序）は明永樂内府本影印本，上海古籍出版社，1984。

磧砂藏本は『宋磧砂大藏經』影印本。

永樂北藏本（永樂9年，1411序）は綫裝書局影印本（第18冊），2000。

高麗刊本は下記の覆印本を用いた。提供してくださった緒方香州氏に謝意を表す。

高麗藏再雕本（高宗25年，1238）

高麗刊本A（高宗24年，1237，崔瑀發願經）

高麗刊本B（高宗元年，1214，符仁寺版）

高麗刊本C（高宗32年，1245，鄭晏發願經，前4紙補刻）

上掲の高麗藏再雕本，磧砂藏本，高麗刊本3本，蘇東坡本，永樂北藏本，集注本には第21分に「爾時慧命須菩提」以下62字が竄入している。

唐以前の『金剛經』寫本は17本が知られる（すべて殘卷。方廣鎰，王招國氏の示教による）が，二字に關するかぎり唐宮廷寫經と異同はない。なお，敦研323號寫本は『金剛經』寫本中もっとも早い南齊建武4年（497）張瓌發願寫經の題記をもつが，「爾時慧命須菩提」62字の竄入があり，「即」「則」異同からみて，明代の集注本系の本文を寫した偽寫本である。

- 12) 拙稿「地獄のなかの救い——金剛經靈驗譚の意味——」，『興膳教授退官記念中國文學論集』，汲古書院，2000。
- 13) 「敦煌出土修心要論本文」，『鈴木大拙全集』第2卷，岩波書店，1968。
- 14) 「『修心要論』九本對照表」（柳田聖山氏作成）に據る。

【附記】 本稿を成すにあたって，緒方香州氏の指導を得た。脱稿後，竺沙雅章先生にお送りして指導を仰いだところ，房山石經本『傳大士夾頌金剛經』では，〔附錄1〕の4のみ「則」であること，また敦煌發見の咸通9年（868）刊本も資料に加えるよう注意があった。該本では〔附錄2〕の28のみ「即」であった。あわせ記して感謝の意を捧げる。

【附録1】 11種『金剛經』「即」「則」異同表（1）「即」

（○印は標準テキストに同じ、×印は缺字。21, 22は三本に附加された「即」）

	唐宮廷寫經經文	大正藏	隋 寫 經	宮 廷 寫 經	玄 宗 注	柳 公 權 書	蘇 東 坡 書	高 麗 藏	高 麗 本 A	高 麗 本 B	高 麗 本 C	集 注 本	永 樂 北 藏
1	即從坐起	748c23		×	○	○	○	○	○	○	○	○	○
2	即非菩薩	749a11		○	○	○	○	○	則	○	○	○	○
3	即非身相	749a23		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
4	即著我人	749b7		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
5	即著我人	749b8		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
6	即非福德性	749b20		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
7	即非佛法	749b25		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
8	即爲著我人	749c10		○	○	○	○	○	則	則	則	○	○
9	即是非相	750a22		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
10	即是非相	750b8		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
11	即是非相	750b8		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
12	即是非相	750b26		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
13	即諸法如義	751a27		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
14	即非一切法	751b3	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
15	即非莊嚴	751b11	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
16	即非具足色身	751c7	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
17	即非具足	751c10	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
18	即爲謗佛	751c13	○	○	○	○	○	○	則	則	則	○	○
19	即非我見	752b18	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
20	即非法相	752b22	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
21	〔即非第一波羅密〕						○					○	○
22	〔即非善法〕											○	○

【附録2】 11種『金剛經』「即」「則」異同對照表（2）「則」

	唐宮廷寫經經文	大正藏	隋 寫 經	宮 廷 寫 經	玄 宗 注	柳 公 權 書	蘇 東 坡 書	高 麗 藏	高 麗 本 A	高 麗 本 B	高 麗 本 C	集 注 本	永 樂 北 藏
1	則見如來	749a24		○	即	○	○	○	○	即	即	即	○

2	則爲著我人	749b7		○	○	○	○	○	○	○	○	即	○
3	世尊則不說	749c13		○	○	○	○	○	○	○	○	即	○
4	則非莊嚴	749c20		○	即	○	即	○	即	即	即	即	即
5	則爲有佛	750a10		○	○	○	即	○	○	○	○	即	即
6	則非般若	750a14		○	○	○	即	○	即	即	即	即	即
7	則生實相	750b1		○	○	○	○	○	○	○	○	即	○
8	則是非相	750b3		○	○	○	即	○	○	○	○	即	○
9	則爲第一希有	750b6		○	○	○	○	○	○	○	即	即	○
10	則名諸佛	750b9		○	○	○	即	○	○	○	即	即	○
11	則爲非住	750b23		○	○	○	即	○	○	○	○	即	○
12	則非衆生	750b27		○	○	○	即	○	即	○	○	即	即
13	則無所見	750c1		○	○	○	○	○	○	○	○	即	○
14	則爲如來	750c4		○	○	○	○	○	○	○	○	即	○
15	則爲荷擔	750c17	○	○	○	○	○	○	○	○	○	即	○
16	則于此經	750c19	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
17	則爲是塔	750c22	○	○	○	○	○	○	○	○	○	即	○
18	則爲生滅	750c26	○	○	○	○	○	○	○	○	○	即	○
19	心則狂亂	751a6	○	○	○	○	即	○	○	○	○	即	○
20	則非菩薩	751a14	○	○	即	○	○	○	即	○	○	即	○
21	則不與我	751a22	○	○	○	○	○	○	○	○	○	即	○
22	則爲非大身	751b5	○	○	○	○	即	○	○	○	○	即	○
23	則不名菩薩	751b6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	即	○
24	則得阿耨多羅	751c26	○	○	○	○	即	○	○	○	○	即	○
25	則有我人	752a8	○	○	○	○	即	○	○	○	○	即	○
26	則非有我	752a9	○	○	○	○	即	○	○	○	○	即	○
27	則非凡夫	752a10	○	○	即	○	即	○	即	○	○	即	○
28	則是如來	752a14	○	○	○	○	即	○	○	○	○	即	○
29	則不說是微塵衆	752b9	○	○	×	○	即	○	○	○	○	即	○
30	則非微塵衆	752b10	○	○	○	○	即	○	○	○	○	即	○
31	則非世界	752b11	○	○	○	○	即	○	○	○	○	即	○
32	則是一合相	752b12	○	○	○	○	即	○	○	○	○	即	○
33	則非一合相	752b13	○	○	○	○	即	○	○	○	○	即	○
34	則是不可說	752b14	○	○	○	○	即	○	○	○	○	即	○